

新年のご挨拶

病院長 清水 敦哉

皆さま、あけましておめでとうございます。昨年1年間のご厚情とご支援にお礼を申し上げますとともに、新年のご挨拶をさせていただきます。

昨年はコロナ禍2年目の闘いとその中での東京オリンピックという人類史上の歴史に刻まれる年でありました。特に昨年8月から9月の第5波の新型コロナウイルス感染症の急拡大は三重県でも1日最大500人超の感染者、2800名近い自宅療養者となりました。津から北の地域におきましては医療ひっ迫となり救急医療搬送が困難なケースも出現する事態となりました。当地区ではありがたいことに救急受け入れで問題になることはありませんでした。改めて松阪市の救急体制の強さを感じましたが、やはり、職員の対応は大変な状況でありました。このような災害級の感染が2度とないことを祈ります。しかし、まだまだ油断できません。変異株の流行や全く異なる感染症のパンデミックが起こる可能性もあります。常に対応できる準備が必要です。



コロナ対応をしつつ当院は新しい医療を開始することができました。それはロボット支援手術（ダヴィンチ手術システム）の導入です。三重大学の先生方のご協力をいただき泌尿器科ならびに産婦人科で開始することができました。本年はさらに消化器外科分野でも導入予定です。医療技術の進歩は目覚ましく、ゲム診断や免疫療法などの抗がん剤治療も更新されています。私たちは常に新しい情報をキャッチし、患者さんへ提供できるようにしなければなりません。日々の自己研鑽が重要です。医療者は一歩でも前に進めるように努力しなければなりません。

コロナ禍で人々の心がかき乱され、格差社会や分断に拍車をかけています。医療技術の進歩は重要ですが、社会的に困窮されている人たちへの支援も大切です。私たちは『済生会』の目標の中で最も重要である生活困窮者を濟（すく）うことを忘れることなく、患者さんに寄り添った医療が提供できるようにしたいと思います。どんな状況においても私たち職員は『済生会』精神を胸に秘め、『済生会』職員である誇りをもって当地区の医療を守り抜きたいと思います。

これからの未来が良い方向に向かうか、悪い方向に向かうのか、それは今を生きる私たちの考え方、行動にかかわってくると思います。私たち医療者は「病院」という小さな窓からの発信しかできませんが、できる限り人間として正しい道を歩めるように全職員で知恵を出し合い、進んでいきたいと思っています。コロナ禍が続く中、皆さまとともに新しい時代に向かって一歩一歩進んでまいりたいと思います。本年も何卒、ご指導、ご支援をよろしくお願い申し上げます。



寅